

## 熱帯の有用材 (8)

緒方 健

## ファロ (Faro)

学名: *Daniellia ogea* (Harms) Rolfe ex Holl. (マメ科)

ファロはマメ科カワラケツメイ亜科 (Caesalpinioideae) の樹木で、セネガル、シエラレオネ、リベリア、コートディヴァール、ガーナ、ナイジェリア、カメルーン、ガボン、コンゴにわたる熱帯西アフリカに広く分布する。商業名としては本来はコートディヴォール名であるファロのほか、ナイジェリア名の *Ogea* または *Oziya* もよく知られ、また学名の *Daniellia* が用いられる場合もある。地域的な呼称としては *Santan* (セネガル), *Nsu* (カメルーン), *Lonlaviol* (ガボン), *Singa* (コンゴ) などがある。

*Daniellia* 属には *D. ogea* 以外に約 10 種があり、いずれも熱帯西アフリカに分布する。そのうち *D. thurifera* Benn., *D. oliveri* (Rolfe) Hutch. et Dalz., *D. klainei* Pierre ex De Wild., *D. soyauxii* Rolfe などは *D. ogea* とほぼ同様の木材を有し、実際には区別しないで混材で取り引きされる。とくに *D. thurifera* は *D. ogea* について重要な木材樹種である。

樹木の形状: 樹高 40~45 m, 直径 1~1.5 m に達する高木で, 30 m またはそれ以上の枝下高をもつ。樹幹は通直, 円筒形で, 板根は発達しない。樹皮は灰白色~黄灰色, ほぼ平滑で, 紙状の薄片となって剝げる。樹皮の切口は橙褐色~暗褐色で, 樹脂がにじみ出る。また樹皮および材部の縦断面にはリップルマークが見られる。葉は長さ 15~35 cm の偶数羽状複葉で, 5~9 対の小葉がある。小葉は対生し, 長さ 3~9 cm, 幅 1~3.5 cm の狭楕円形で, 3~6 mm の小葉柄がある。花序は総状で, 腋生または頂生する。花は径 1 cm 程度で, 桃紫色を帯び, 萼片 4, 花弁 5, 雄ずい 10。果実は長さ 6~9 cm, 幅 3~4 cm の扁平なさやで, 紫褐色の楕円形をした 1 個の種子をもつ。乾季のはじめに落葉して花が咲き, 花の終る頃に鮮やかな紅色の葉が出る。*D. thurifera* は形態的にも *D. ogea* とよく似ており, 花がないと識別が困難である。両樹種は共に陽樹で, *D. ogea* は湿潤落葉樹林に, また *D. thurifera* はより雨量の多い常緑樹林に生育するが, その境界地域では両者が共存して見られることもある。

木材の性質: 辺材は灰白色~淡黄灰色~帯褐灰色で, 幅が広く, 10~18 cm ある。心材は灰桃色~桃褐色~褐色で, 部分的にあいまいな暗色の縞をもつことがある。肌目は粗, 木理は通直かやや交錯する。鋸削面には光沢がある。気乾比重は 0.32~0.58 で, *D. ogea* より *D. thurifera* や *D. oliveri* の方が一般に比重がやや高い傾向が

OGATA, Ken: Useful Timbers in the Tropics (8) Faro

農林水産省林業試験場木材部

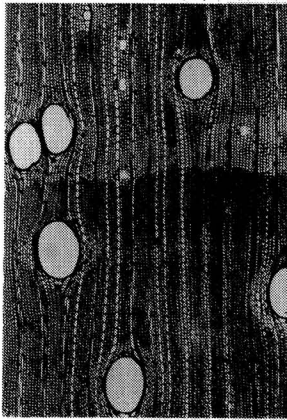


写真-1 *Daniellia ogea* 材  
木口面 (16×)

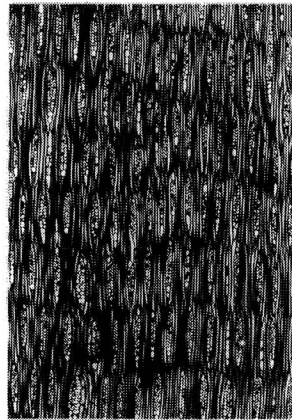


写真-2 同左板目面 (16×)

ある。また辺材にくらべ樹脂を含んでいる心材の方がかなり比重が高いことがある。

帯状の柔組織が1~5 mm のやや不規則な間隔であり、よく削った木口をルーペで見ると道管の周囲の翼状柔組織とともに淡色の組織として認められる。顕微鏡的な特徴としては、孤立管孔の接線方向の最大径は300~350  $\mu\text{m}$ 、管孔の分布数は1~3/ $\text{mm}^2$ 。放射組織は主に2~3列、高さ約500  $\mu\text{m}$ で、明瞭な層階状を示し(写真-2)、そのため縦断面にリップルマークが現れる。散在型の垂直樹脂道があるのが *Daniellia* 属の著しい特徴で、木口では微小孔としてルーペでも注意すれば認められる。垂直樹脂道はフタバガキ科を除けばマメ科の *Sindora*, *Copaifera*, *Gossweilerodendron* などごく限られた属にしか見られないから識別上よい特徴となる。シリカは含まない。

乾燥は容易でほとんど問題はないが、厚い板ではいくらか狂いや落込みを生ずることがある。生材から気乾材までの収縮率として半径方向2.6%、接線方向5.6~8.2%の値が出されている。耐久性は辺材、心材とも乏しい。とくに幅の広い辺材は青変菌が入りやすいので、伐倒してから製材、乾燥を速やかに行わなければならない。またヒラタキクイにも犯されやすい。心材への薬剤の注入は困難である。強度は比重相当だが、曲木には適さない。材が軟らかいので、刃物は鋭利なものを用いないと表面が毛羽立ちやすい。接着性は良い。塗装性も良好だが、目止めを十分に必要があり、またやにの多いものはあらかじめアルコールで拭き取っておくのがよい。

用途としては通直、円筒形の大径材が得られるため、合板に最も適している。比重が低いから、普通は合板の中芯用だが、縞のある材は装飾用にも用いられる。その他には針葉樹材の代用として軽造作材、箱などにする。

現地では幹の基部付近に中心まで達する孔を開け、にじみ出る褐色の樹脂を集める。これはいぶすと芳香があり、香として用いられる。また Gum copal または West African copal と呼ばれてワニスの原料としても取引される。